

夫天に月なく日なくば草木いかに生ずべき。人に父母あり、一人もかけば子息等そだちがたし。其の上過去の聖靈は或は病子あり、或は女子あり。とゞめをく母もかいがいしからず。たれに^誰い^言るあづけてか冥途^{めいど}にをもむき給ひけん。

大覺世尊、御涅槃の時なげいてのたまわく、我涅槃すべし、但心にかゝる事は阿闍世王のみ。迦葉童子菩薩、仏に申さく、仏は平等の慈悲なり。一切衆生のためにいのちを惜しみ給ふべし。いかにかきわけて、阿闍世王一人とをほせあるやらんと問ひまいらせしかば、其の御返事に云はく「譬へば一人にして而も七子有り、是の七子の中に一子病に遇へり、父母の心平等ならざるに非ず、然れども病子に於て心則ち偏に多きが如し」等云云。天台、摩訶止観に此の經文を釈して云はく「譬如七子、父母非不平等、然於病者、心則偏重」等云云とこそ仏は答へさせ給ひしか。文の心は、人にはあまたの子あれども、父母の心は病する子にありとなり。仏の御ためには一切衆生は皆子なり。其の中罪ふかくして世間の父母をころし、仏經のかたきとなる者は病子のごとし。しかるに阿闍世王は摩竭提国の主なり。我が大檀那たりし頻婆舍羅王をころし、我がてきとなりしかば、天もすてゝ日月に^{へん}変いで、地も^{いただ}頂かじとふるひ、万民みな仏法にそむき、他国より摩竭提国をせむ。此等は偏に悪人提婆達多を師とせるゆへなり。結句は今日より悪瘡身に出でて、三月の七日無間地獄に墮つべし。これがかなしければ、我涅槃せんこと心にかゝるといふなり。我阿闍世王をすくひなば、一切の罪人阿闍世王のごとしとなげかせ給ひき。

しかるに聖靈は或は病子あり、或は女子あり。われすてゝ冥途にゆきなば、かれたる朽木のやうなるとしより尼が一人とゞまりて、此の子どもをいかに心ぐるしかるらとなげかれぬらんとおぼゆ。かの心のかたがたには、又日蓮が事、心にかゝらせ給ひけん。仏語むなしからざれば法華經ひろまらせ給ふべし。それについては、此の御房はいかなる事もありていみじくならせ給ふべしとおぼしつらんに、いかいなくながし失せしかば、いかにやいかにや法華經・十羅刹はとこそをもはれけん、いまゝでだにもながらえ給ひたりしかば、日蓮がゆりて候ひし時、いかに悦ばせ給はん。又いゝし事むなしからずして、大蒙古国もよせて、国土もあやをしげになりて候へばいかに悦び給はん。これは凡夫の心なり。法華經を信ずる人は冬のごとし、冬は必ず春となる。いまだ昔よりき

か^見ずみず、冬の秋とかへれる事を。いまだきかず、法華經を信ずる人の凡夫となる事を。
經文には「若^{にやく}有^{もん}聞^{ぼう}法^{しや}者無^い一^ふ不^た成^り仏」ととかれて候。故聖靈は法華經に命をすてゝをは
しき。わづかの身命をさゝえしところを、法華經のゆへにめされしは命をすつるにあら
ずや。彼の雪山童子の半偈のために身をすて、薬王菩薩^{ひじ}の臂をやき給ひしは、彼は聖人
なり、火に水を入るゝがごとし。此は凡夫なり、紙を火に入るゝがごとし。此をもって
案ずるに、聖靈は此の功德あり。大月輪の中か、大日輪の中か、天鏡をもって妻子の身
を浮かべて、十二時に御らんあるらん。設ひ妻子は凡夫なれば此をみずきかず。譬^{たと}へば
耳^{みみ}し^みたる者の^{いかずち}雷^{いかずち}の声をきかず、目つづれたる者の日輪を見ざるがごとし。御疑ひあ
るべからず。定んで御^{まも}りとならせ給ふらん。其の上さこそ御^{まも}りありあるらめ。

力あらばと^{まも}りらせんとをもうところに、衣を一つ給^たふでう存外の次第なり。法華
經はいみじき御經にてをはずれば、もし今生にいきある身ともなり候ひなば、尼ごぜん
の生きてもをわしませ。もしは草のかげにても御らんあれ。をさなき^公き^運んだち等をば、
かへりみたてまつるべし。さ^佐どの国と申し、これと申し、下人一人つけられて候は、い
つの世にかわす^まれ候べき。此の恩はかへりてつかへ^仕たてまつり候べし。南無妙法蓮華經。
南無妙法蓮華經。恐々謹言。

五月 日

日 蓮 花 押

妙 一 尼 御 前